

時を紡いで 14年 217日

航行中の太平洋フェリーでの演奏

尾形 明範

「いつかまた海の上でお会いいたしましょう」

これは、太平洋フェリーの船上で私が演奏した際に、ステージで最後に述べる一言である。人間が、不特定の「まわりの人たち」と関わりを持ちながら生きる以上、人生にはもはや自分の力だけではどうにもならないことがある。それを思うとき、冒頭の「いつか」が、重くのしかかってくる。今回の投稿は活動報告という名の、私の人生史のようなものであるということをまずお断り申し上げる。



写真・きたかみと愛用キャリーケース、仙台港にて(2016年)

前回の航海は 2001年6月の仙台～苫小牧の一往復(初代きそ)であった。ステージをどのように行うかは、事務長の裁量による。楽器を常駐させているラウンジで行うことが殆どであるが、ごく稀に楽器を台車で運び、案内所近くの喫茶コーナーで行われることもあった。このときの航海は平日ということもあってお客は少なく、この日の事務長からは喫茶コーナーでステージを行うようお願いされた。

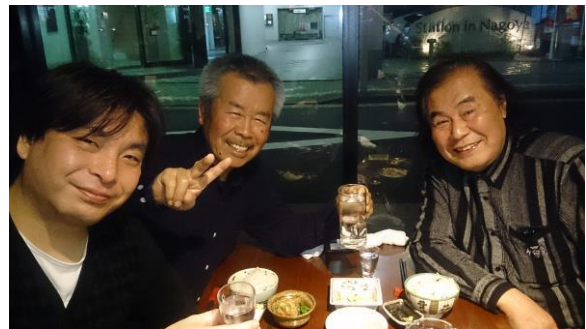
たいがいのお客様はコーヒーやビールを片手にくつろいで聞いておられるが、この日は中国の団体さんが多かった。なかの一人が、NHKの「ふるさと」を作曲された方で、エレクトーンにたいへん興味を示され、お仲間ともども楽器の前で最後まで聞いてくださったのが印象的であった。私がこの時弾いた最後の曲は、ハチャトゥリアンのガイヌヌより「子守唄」であった。

しかし、いちばん顔を合わせる機会の多い事務長とは意見の食い違いやすれ違いが続き、ついぞ掛け違えたボタンは直ることなく、私は船を下りるに至った。

このステージを境に、私は現在の会社に身を置いた。人生設計を考えれば、フリーでいつまでも船の上にいるわけにはいかない。頭では分かっている。いや、そう思い込む努力を重ね続けた。どうかたちであれ船を「降りる」ことは宿命なのだ、と。

このことについては、数え切れない方々から多くの励ましと助言を頂いた。もちろん多大に感謝しているのだが、船と私が離れて、いや離されて、しかしいざれにせよ、もう未来永劫埋まることのできない溝が自分のなかに存在してしまったのだ。そしてどんな励ましも助言も心の最奥に届くことは決して無く、表面をなんとか取り繕いながら長い長い年月を重ねてきた。

転機が訪れたのは数年前、年度末に近い時期であった。私もよくお世話になった事務長のおひとりが定年退職され、最後の航海の後に名古屋で送別会をやるというのだった。私はなんの迷いも無く、当時お世話になった御礼を申し上げに日帰りで名古屋に出かけた。いつもお世話になっている船長のほか、催事仲間もあり、会場ではしばしの同窓会のような印象もあった。



写真・右よりポニー東山氏、山崎攻船長、筆者(名古屋にて)

このとき、名前だけしか存じていなかったポニー東山氏と初めてお目にかかった。氏は太平洋フェリー船内催事の先駆者であり、ピアノを主体としていながらも、エレクトーン、歌、なんでもやってしまうスーパーエンターテイナーである。私が親しくしている船長とも長い付き合いらしく、いろいろと積もる私の話を聞いてくださった。私がおぼろげ東京から定年退職の事務長のもとに挨拶に来た、と船長が伝えると「男

気があるやつだ!!」とお褒めのことばを頂戴した。今思えば、これがきっかけで、太平洋フェリー復帰の道が大きく進展したように思う。

それから数年、お互いのタイミングが合わずにいたものの、2016年1月、ついにそのときがやってきた。仙台～苫小牧一往復、氏のご協力により船上でステージを行えることになったのである。長く長く夢見続けた復活の日。乗船船舶は「きたかみ」。三隻就航しているなかでは最古参であり、私の初仕事だった思い出の船でもある。代替わりした他の二隻には船内の設備には及ぶべくも無いが、他の船より在籍期間が長いぶんお客様から大切にされてきた温かみがこの船にはある。



写真・きたかみに搭載の EL-900 に刻まれた傷(2016年)

当時 20代だった私は 40代になり、頭に白髪も混じり始めてきた。また、当時最新鋭だった EL-900 は長い航海の間に多くの傷が刻まれていた。楽器に刻まれた傷は数知れない荒天に揉まれただけではあるまい。詳細は窺い知ることができないが、東日本大震災での大津波警報発令により保船のため本船が沖合に航行した際、エレクトーンもまた大津波に耐えたに違いない。



写真・苫小牧フェリーターミナルに展示されている写真

太平洋フェリーでは 1999年にすべての船に EL-900 が搭載され、私は乗船時にレジストデータとシーケンサーを入れたキャリーケースを持ち歩いていた。太平洋フェリーのキャラクター「フェリカ」のマークをカッティングシートで自作したこのキャリーケースもま

た、14年 217日ぶりの乗船となる。このケース、私がライブをやる際に持ち歩いているもので、この間、青森、上越、大阪、新居浜など全国各地をお供したが、やはり本拠地の名古屋、仙台、苫小牧がよく似合うケースである。当時はシーケンサーを入れていたが、時代とともに今は Mac Book Pro を入れている。

相棒の機材をそのケースに入れて引き連れて舷門を入ると、どんなことをしても、誰がどんなことを言っても埋められなかった時間が、急速に埋められてゆく。この船にもう一度戻ることではしかなかった、世の中でこれひとつしかない解決法。あの日私が船を降りてから実に 14年と 217日。干支を一周してもまだ遥かにあまりある果てしなく長かった日々。それは、船への思いを封印し、偽りの元気を出して生きた日数に等しい。

乗船する船と港、時間帯により乗船する場所は異なるが、通いなれたこの船へは、この日仙台港で舷門を過ぎエントランスの階段を上がり、案内所の内部へ入る。そこからカーテンで仕切られた角度の急激な階段を上り、船員区画であるスペースへと踏み入れる。最後に本船に乗務したのは 2000年、すでに 16年近くが経過していたが、不思議なもので、船舶の、しかも乗組員区画の独特の匂いは変わっていない。



写真・苫小牧港に停泊中の「きたかみ」(入港するシルバーフェリー「シルバープリンセス」より撮影・2017年7月)

遠いあの日、確かに私はここにいた。遠い過去と現在とが繋がった瞬間、それは三日前のような感覚へと戻された。いままでの遥か長い、気の遠くなる辛く長かった時間でさえも数秒で報われた感覚。もっとも私は出航後にステージがあるから感慨ばかりにも浸れないのだが、長く途切れた時を紡がざるを得なかった。ステージを共にするポニー氏は出かけていたのか、私の部屋のドアの下に本日の進行予定案が書かれた紙が置かれてあった。予定は氏のソロ、私のソロ、氏との競演の三本立てである。私は当時のように部屋で煙草を燻らせ、本日のステージをイメージした。なお、写

真は極力、当時の持ち物と位置を同じになるよう計算したものであって、偶然ではない。



写真・定点観察「きたかみ」予備室 A,2000年(下)と2016年(上)

変わったのは置かれているテレビと鏡に映る自分の姿だけだ。リハーサルでラウンジへ。往年のスタンダードナンバーでのセッション、並びに、氏の歌の伴奏。永く一人乗務を続けていた私には新鮮であり、熱が入る。船員食堂での夕食もそこそこに、氏との入念な打ち合わせ。我々は今宵ご乗船のお客様をお迎えするエンターテイナー。出航まもなく、ステージの案内放送が船内に流れる。ポニー氏の名前とともに、私の実名が船内に響き渡る。そう、私はこの日のために死なずに生きてきたのだ!!これまで思いを留めてきた自分を奮起させるとともに、お世話になったポニー氏、山崎船長への最敬礼への思いが立ち上がる。人は理屈なんかでは生きていけないのだ。

ステージ 15 分前。客室事務員はお客様をラウンジへ誘導し、我々は舞台袖。何度本番を経験しても、この時の緊張感は変わることが無い。幕が上がりスポットに照らされる。14年217日を経て口にする「ご乗船のお客様、こんばんは。本日は太平洋フェリーきたかみにご乗船いただきまして誠にありがとうございます」。スポット照らすステージのエレクトーンに向かう。縦揺れとも横揺れともつかない、椅子に座り小刻みに左右上下に感じるこの揺れ。これこそが太平洋フェリ

一のステージだ。昔からバランス確保は悩みだったが、今はそれが懐かしくも嬉しくもある。昔、台風の余波で演奏中に楽器が一メートルぶっ飛んだこともある。

今回の復帰に関して、どうしてもレパートリーに組み込みたい楽曲があった。それは、当時弾いていた楽曲をいまの技量でリアレンジすること、そしてもうひとつ、当時弾こうとリストアップしていたながら、下船とともに永く保留としていたもの。前年の銭湯ライブ「月の湯ナイト2」で弾いた Hung Up Your Hang Ups もその一曲である。Voice arrangement をふんだんに加えたこの曲は、ステージで PA 担当の事務部の方からもご評価いただいた。エレクトーンでここまでやってきた人はいない、と。しかしながら、まだ志半ばの楽曲もある。Miles Davis の「Walkin」、Tokyo Ensemble lab の「Nica's Dream」。しかしながら 14年217日ぶりにステージに立ち、お客様の前で「それではまたいつか、海の上でお会いいたしましょう」を述べ、居室に戻るためにデッキに出て夜の航跡を眺めたとき、確かに私は「あの日太平洋に置いてきた喜びと悲しみ」をすべて取りにいったのだった。取り返せない悲しみの重さに胸が潰されそうになりながら。

ステージが終わって、ポニー氏と船員区画の食堂で杯を交わし、外で一服した。私があの日から14年以上吸い続けたロングピースは、この日を境に、かつて私が船に乗っていたときと同じ、ラクマイルドに戻した。氏はこのことに頷きながら、私と次の乗船時のレパートリー談義に花が咲いた。

「次は二人でリチャードクレーダーマンはどう?」

「いいですね、駆け上がりのストリングス、私がエレクトーンで盛り上げて弾きますから」

「僕もね、同じことを考えていたんだよ」



※ 今春急逝したポニー東山氏にこの文章を捧げます。
(エレクトーン奏者 おがた あきのり)